

世界を見る眼

【特集】2024年インドネシアの選挙

第2回 インドネシアからの大統領選挙キャンペーン報告——選挙の公正性は守られるのか

Presidential campaign report from Indonesia: assessing the challenges to the fair election

水野 祐地

Yuji Mizuno

2024年2月

(5,560字)

*表、写真は文末に掲載しています

2024年2月14日に予定されているインドネシアの大統領選挙に向けて、2023年11月28日に選挙キャンペーンの火蓋が切って落とされた。宗教的アイデンティティが争点のひとつとなり社会の分断が顕わになった2019年の選挙と比べると盛り上がりには欠ける印象のある今回の選挙だが、インドネシア政治の今後を見定めるうえで重要な選挙であることには違いない。

権威主義体制をとる国が多い東南アジアで、インドネシアは数少ない民主主義国のひとつであると評されてきた。また、過去5年ほどの間に法の支配や権利保障といった自由主義の側面が浸食されつつあるという現象はみられるものの、公正な選挙を実施するという民主主義の手続き的な側面は相応に担保されている、というのがこれまで主流の見方であった。

しかし、今回は選挙の公正性までが危険に晒されているとして、各種メディアや市民社会が神経を尖らせている。選挙の現場で何が起きているのか、その全貌を把握するのは難しいが、現地メディアの報道や選挙戦に関わる人々とのインフォーマルな会話から垣間見えてくる実情について報告する。

現職大統領による特定候補の後押し——治安当局の事例

今回の選挙では現職のジョコ・ウィドド（通称ジョコウィ）政権の実質的な後押しを受けたプラボウォ・スビアント＝ギブラン・ラカブミン・ラカ組が選挙戦を一步リードしている。その対抗馬が、アニス・バスウェダン＝ムハイミン・イスカント組とガンジャル・プラノウォ＝マフッド・MD組である¹。

ジョコウィの長男であるギブランがプラボウォの副大統領候補となれたのは、憲法裁判所が「40歳以上」という立候補要件を定めた総選挙法の条項に対して違憲判決を出し、36歳のギブランの立候補を可能にしたためであった。その憲法裁判所における審理では、ジョコウィの妹婿であるアンワル・ウスマン長官が不正を働いていたことが明らかになるなど、選挙戦前からすでに公正さに疑問を感じさせる問題が発生している。

現職大統領のジョコウィは、自らの強力な政治権力も使いながら、特定の候補（プラボウォ=ギブラン組）に対してさらに広範な支援を行っている形跡がある。そのための布石とみられるのが、ジョコウィによる治安当局の幹部人事である（表1）。選挙の年に合わせるかのように、ジョコウィは、複数の国軍の高官ポストに親交の深い人物を登用している。その際たる例が、2023年11月に就任した国軍司令官のアグス・スビヤントである。彼はソロ地区軍管区司令官を務めていた時期に、当時ソロ市長だったジョコウィの信頼を得た。彼は2023年10月25日に陸軍副参謀長から陸軍参謀長に昇格した後、1カ月にも満たない異例の速さで11月22日に国軍司令官に昇格した。

治安当局の高官がジョコウィ派の人物で固められていくなかで、これらの治安機関が選挙プロセスで中立性を保てるのか、という疑問が市民社会からは投げかけられている。当然ながら、それぞれの機関のトップは中立を守ることを宣言している。しかし、有力な調査報道誌『Tempo』は、プラボウォ陣営の対抗馬であるガンジャル陣営およびアニス陣営に対して、治安当局による低強度な圧力が散発的ながらも断続的にかけていることを報じている。具体的には、対抗馬への支持を表明した村長が汚職を理由に警察の尋問を受けたり、警察が対抗馬の選挙運動を尾行したりといったことが起きているというのである。そうした圧力を受けた村長らは、対抗馬を支援する活動を控えるようになってしまっている。他にも、アニス候補が11月17日に予定していたジョグジャカルタの国立ガジャ・マダ大学での講義が治安当局などの圧力で中止された事例もある。

治安当局が言論の自由や司法の独立に対して圧力をかけているとみられる事例もある。話題になったのは、[歯に衣着せぬ発言をするガンジャル支持派の文化人ブテト・カルタレジャサの件](#)である。12月1日にブテトがジャカルタで開いた風刺劇のイベントに警察が訪れ、ブテトは「政治的な要素を含めない」という文書に署名することを強制された。怒ったブテトはこれをメディアに公表したが、警察は「そんな署名をさせた覚えはない」と否定した。その後、ブテトはプラボウォ支持者により偽情報拡散の罪で警察に告発されている。この他にも、ギブランの立候補を可能にした憲法裁の違憲判決が出される前に、警察が判事の行動を監視し、憲法裁での法令審査がギブランに有利になるよう圧力をかけていたとの報道が『Tempo』によりなされている。

さらに、2024年11月に実施される統一地方首長選挙の前に首長の任期が切れた地域で、ジョコウィと関係の深い人物や元治安当局の幹部が中央政府によって首長代行に選ばれるケースがみられる（表2）。例えば、大統領選に立候補しているアニスが州知事を務めていた

ジャカルタ首都特別州では、後任の州知事代行にジョコウィ大統領と関係の近い国家官房の高官が選ばれている。同様に大統領選の候補者であるガンジャルが州知事を務めていた中ジャワ州でも、後任の州知事代行にジョコウィがソロ市長を務めていた時に同市の警察本部長を務めていた人物が選ばれている。他にも、バリ州や北スマトラ州などガンジャル候補を擁立している闘争民主党（PDIP）の地盤や、アチェ州、西パプア州など分離独立運動の歴史を持つ地域の州知事代行に元治安当局幹部が任命されている。国家公務員委員会（KASN）は、これらの首長代行が中立性を維持できていない可能性を指摘して懸念を表明している。首長代行は次の首長が正式に選出されるまで暫定的に日常の行政を遂行することを任務としており、新たな政策の実行など政治的イニシアティブを取るべきではないにもかかわらず、ジャカルタ州知事代行がアニス知事時代の政策を覆すといった事例が実際に起きている（Wilson 2023）。

選挙勝利の鍵となる政治資金——見え隠れする治安当局の圧力

治安当局の選挙キャンペーンに対する圧力のなかでも深刻な影響が懸念されているものとして、選挙資金源に対する圧力がある。『Tempo』の報道によれば、治安当局はプラボウオの対抗馬の大口献金者に対して、汚職捜査をちらつかせるなどして選挙資金を提供しないよう圧力をかけている。公的部門で汚職が蔓延しているインドネシアにおいて、大規模な国家プロジェクトに参加する実業家が何らかの形で不正行為に手を染めていることは十分ありうる。そのため、プラボウオの対抗馬を支持する実業家などが政治献金を躊躇し、選挙活動に影響が出ているというのである。

プラボウオの対抗馬の陣営で選挙ボランティア運営に携わるある関係者は、筆者とのインフォーマルな会話のなかで、「資金繰りが厳しいのは事実だ」と述べ、ボランティアのような対価を求めている人々の活動でも必要となる、移動やイベント実施などのロジスティクス面での資金を調達することさえ難しくなっている現状を吐露した²。また、別の選挙対策チームの関係者は、『『ジョコウィ政権の権威主義化を問題提起しろ』と言われても、そのための金がなければ組織的な大衆動員を行うことはできない』と不満を漏らした³。これは、インドネシア政治の実情として政策的熟議だけでは政治が動かないことや、民主派勢力でも政治資金を断たれるとほとんどなす術がない現状を示している。

ジョコウィの後押しを受けたプラボウオ陣営が圧倒的な資金力を持っていることを考えると（表3）、対抗馬の資金不足は一層深刻な問題である。プラボウオの兄であるハシム・ジョヨハディスクスモはフォーブス誌のインドネシア長者番付トップ50に入る有数の資本家であり、プラボウオが党首を務めるグリンドラ党のパトロンとして多額の選挙資金を提供できる。プラボウオを支持する政党との連携関係を持つ選挙拠点（「ポスコ」という）の関係者によれば、選挙資金は選挙イベントに参加する人々を招集するのに使用されており、これ

には「莫大な資金を要する。1人あたりいくらというのは答えられないが、個々の地域ごとに数千人または数万人という単位でみれば想像がつくだろう」と述べる⁴。また、各地域の支持率の動向をリアルタイムに把握するうえで、選挙コンサルタントとしてビジネス化している世論調査会社との連携も欠かせない。東西 5100 キロ、南北 1700 キロの広大な領域に 1 万 7000 あまりの島々からなるインドネシアで世論調査を実施すれば、巨額の費用がかかる。

さらに、資金力があれば、表には出ることのない、ソーシャルメディア上の世論誘導を行う地下ネットワークをいくつも運用することができる。インドネシアの若者の間で圧倒的な人気を誇るティックトック (TikTok) では、プラボウォが大人気である。選挙時のソーシャルメディア戦略が高度に組織化されて久しいインドネシアにおいて、TikTok におけるプラボウォ人気を完全に自然発生的なものとするのはあまりにも単純すぎる見方である。

政府介入に関する実態把握の難しさ——インドネシア連帯党 (PSI) の事例

しかし、このような治安当局の圧力を実際に証明するのは極めて困難である。筆者がプラボウォ支持派の政党であるインドネシア連帯党 (PSI) の政治家に対して今回の選挙における政府の介入について聞いてみたところ、彼は「答えは簡単です。介入が行われているという証拠を見せてみなさい」と述べた⁵。

この PSI は 2014 年に設立された新党である。当初は反汚職・反不寛容・反世襲政治・若者主導を掲げ、2019 年総選挙では都市部の若い世代を中心に支持を集めた。しかし現在は、既得権益との強い関係性が明るみに出て、革新政党としてのイメージは消えつつある。

『Tempo』によれば、PSI に対しては、シンガポールを拠点とする新興資本家で元政治家のジェフリー・ジェオヴァニーが主要な財閥 (コングロマリット) から政治献金を集めて、資金的バックアップを行ってきたという。過去に PSI に献金したコングロマリットには、長者番付 1 位のハルトノ家が所有するタバコ大手のジャルム・グループや、アジア通貨危機後の中銀流動性支援融資 (BLBI) の不正流用問題の過去をもつガジャ・トゥンガル社などが含まれている。

その PSI には、2023 年 9 月 23 日にジョコウィの次男であるカエサン・パンガレブが入党し、そのわずか 3 日後に党首に選出された。ジョコウィは、もともと政治的アウトサイダーであったことから母体となる政党を保有しておらず、自身が所属する PDIP 内ではメガワティ・スカルノプトゥリ党首よりも発言力が小さい。そこで、2024 年 10 月に任期満了を迎えて大統領を引退するジョコウィは、息子を通して政界への影響力を維持することを目論んでいる。そのようななかでカエサンを党首に迎えた PSI は、ジョコウィがファミリーを通じて影響力を行使するための政治的な道具となることを選んだ。まさに PSI は「ジョコウィ王朝」のための政党として生まれ変わったのである。

一方、PSI は国民の人気が高いジョコウィの政治路線を継承すると有権者に訴えることで

議席を獲得しようとしている。同党は、2019年の選挙では議席獲得に必要な得票率4%をクリアすることができず、国会で議席を獲得するには至らなかった。2024年総選挙ではこの得票率4%をクリアすることが目標である。

その取り組みを象徴するのが、都市部から地方の農村にまで至る所で目にするPSIの選挙ポスターである。これについてPDIP副党首のひとり、[「なぜこんな新党が一晩にして巨大なポスターをインドネシア中に設置できたのだ？」](#)とコメントし、PSIが政府から不当に協力を得ているのではないかと疑問を呈した。筆者が話をしたPDIPの地方政治家も同様に、「選挙開始日に合わせて用意周到にポスターが設置された。(大政党の)我々でさえもここまで組織的にはできなかった」と述べている⁶。『Tempo』は、PSIのポスターが、ギブラン副大統領候補が市長を務めるソロ市から搬送されていると報道しているが、それ以上のことはわからない。政府機構による後援を示す確たる証拠がない以上、真相は不明のままである。

民主制下での権威主義的革新

オーストラリア国立大学教授のエドワード・アスピノールは、[今回の選挙に関する論考](#)において、「(『Tempo』などの)報道内容については慎重に取り扱う必要があり、政府による介入は前例がないわけではないが、これまでは主に地方選挙において見られるものであった。しかし今回、プラボウォの対抗馬は、より中央集権的に政府機構が動員されることを恐れている」と述べて、システムティックな介入が行われているとする見方に対しては慎重な姿勢を示しつつも、プラボウォの対抗馬が持つ危機意識を汲み取る必要性を指摘している。

表面には出てこない中央政府による圧力は、民主制を形式的に維持しながら政治権力を濫用することで権力維持が試みられる「権威主義的革新 (authoritarian innovation)」(Curato & Fossati 2020)のなかでも、特に洗練された形態のものである。こうした「革新」は、国民が気付かないうちに、権力を維持するための基盤を水面下で構築していくことを可能にする。選挙民主主義の公正性を担保する法制度が侵食される局面までは行っていないとはいえ、「あの時に公正性に関する規範の瓦解が始まったのだ」と将来的に回顧されるようなことがないことをインドネシアの市民社会は固唾を飲んで見守っている。■

※この記事の内容および意見は執筆者個人に属し、日本貿易振興機構あるいはアジア経済研究所の公式意見を示すものではありません。

写真の出典

- すべて筆者撮影

参考文献

- Curato, Nicole & Diego Fossati (2020) “Authoritarian Innovations: Crafting support for a less democratic Southeast Asia,” *Democratization*, 27(6): 1006-1020.
- Haripin, Muhamad & Adhi Priamarizki (2023) “Jokowi consolidates influence over TNI as elections loom,” *New Mandala*.
- Wilson, Ian (2023) “Indonesia’s Appointed Leaders and the Future of Regional Elections,” *ISEAS Perspective*, 2023/57.

著者プロフィール

水野祐地（みずのゆうじ） アジア経済研究所地域研究センター東南アジア I 研究グループ 研究員。修士（地域研究）。専門はインドネシア政治研究、イスラーム地域研究。最近の著作に、“Digital Anti-Islamist Activism at the Forefront of Political Polarization in Indonesia,” *Trending Islam: Cases from Southeast Asia*. Singapore: ISEAS – Yusof Ishak Institute (2023) など。

注

- ¹ 2024 年大統領選の立候補者については、本特集の第 1 回、東方孝之「[大統領選挙の見どころ——ジョコウィ路線の継承をめぐる三つ巴の争い](#)」『IDE スクエア』2024 年 1 月、を参照。
- ² プラボウォの対抗馬の陣営における選挙ボランティア運営関係者とのインタビュー、2023 年 11 月 29 日、ジャカルタ。
- ³ プラボウォの対抗馬の陣営における選挙対策チーム関係者とのインタビュー、2023 年 12 月 5 日、ジャカルタ。彼によれば、[2019 年 9 月に実施された汚職撲滅委員会の弱体化に対抗する大規模な学生デモ](#)ですら、ロジスティクス面での資金的なバックアップなしには大規模な動員はできなかった。
- ⁴ プラボウォ陣営のポスト関係者とのインタビュー、2024 年 1 月 3 日、ジャカルタ。
- ⁵ PSI 政治家アデ・アルマンドとのインタビュー、2023 年 12 月 7 日、ジャカルタ。
- ⁶ PDIP 政治家とのインタビュー、2023 年 12 月 8 日、チレボン。

表1 ジョコウィ大統領による最近の治安当局人事

機関	名前	現在の役職	ジョコウィとの繋がり
国軍	アグス・スピヤント陸軍大将	国軍司令官 (2023年11月～)	ソロ地区軍管区司令官 (2009-2011)、ポゴール地域軍管区司令官 (2020)、大統領警護隊隊長 (2020-2021)
国軍	マルリ・シマンジュンタク陸軍大将	陸軍参謀長 (2023年12月～)	大統領警護隊隊長 (2018-2020)、ジョコウィの右腕であるルフット・パンジャイタン海事・投資担当調整大臣の女婿
国軍	モハマド・ハサン陸軍少将	ジャヤカルタ軍管区 (ジャカルタ首都圏) 司令官 (2023年3月～)	ポゴール地域軍管区司令官 (2018-2019)、大統領警護隊A師団隊長 (2016-2018)
国軍	ノヴィ・ヘルミ・プラセティア陸軍少将	イスカンダル・ムダ軍管区 (アチェ州) 司令官 (2023年3月～)	ポゴール地域軍管区司令官 (2019-2020)、大統領警護隊D師団隊長 (2013-2015)
国軍	トリ・ブディ・ウトモ陸軍少将	ムラワルマン軍管区 (南・東・北カリマンタン州) 司令官 (2023年6月～)	大統領警護隊隊長 (2021-2022)、大統領警護隊A師団隊長 (2016-2018)
国軍	ウィディ・プラセティヨノ陸軍中将	ディポネゴロ軍管区 (中ジャワ州・ジョグジャカルタ特別州) 司令官 (2022年4月～)	ソロ地区軍管区司令官 (2011-2012)、大統領補佐官 (2014-2016)
国軍	ラファエル・グラナダ・ベレイ陸軍少将	ブラウィジャヤ軍管区 (東ジャワ州) 司令官 (2023年11月～)	大統領警護隊隊長 (2023)
国軍	モハマド・トニー・ハルヨノ空軍中将	第2国防地域統合司令部司令官 (2023年11月～)	国家官房国軍事務局 (2020-2022)
警察	リストियो・シギット警察大将	国家警察長官 (2021～)	ソロ市警察本部長 (2011)、大統領補佐官 (2014)
警察	アハマド・ルトフィ監察官	中ジャワ州警察本部長 (2020～)	ソロ市警察副本部長 (2011)

(注1) ポゴール地域軍管区は大統領宮殿があるポゴール市を管轄している
(出所) Haripin & Priamarizki (2023) および *Tempo* (December 4, 2023) をもとに筆者作成

表 2 州知事代行の主な事例

州	名前	就任年月	主な経歴
ジャカルタ特別州	ヘル・ブディ・ハルトノ	2022年10月～現在	国家官房大統領事務局長（2017～）
西ジャワ州	ベイ・マクムディン	2023年9月～現在	国家官房大統領事務局長儀典・広報・メディア部局長（2021～）
中ジャワ州	ナナ・スジャナ	2023年9月～現在	ジャカルタ首都圏警察本部長（2020）、ソロ市警察本部長（2011～2012）
アチェ州	アフマド・マルズキ	2022年7月～現在	内務省法務・国家統一担当専門スタッフ（2022）、イスカンダル・ムダ軍管区司令官（2020-2021）
西パプア州	パウルス・ワテルパウ	2022年5月～2023年11月	パプア州警察本部長（2019～2022）

（出所） *Tempo* (December 4, 2023) などから筆者作成

表 3 総選挙委員会（KPU）に登録された選挙戦開始時の選挙資金額（登録番号順）

アニス陣営	10億ルピア
プラボウォ陣営	314億ルピア
ガンジャル陣営	233億ルピア

（出所） *CNN Indonesia* (December 23, 2023)



写真1 愛嬌あるピクサー風アニメ・キャラクターで描かれたプラボウォ=ギブラン組の選挙ポスター



写真2 ジョコウィ大統領を支援するボランティア団体「プロジョ」が設置したプラボウォ=ギブラン組の選挙ポスター



写真3 「プラボウォ・スビアントの時が来た」と書かれたポスター。イスラーム保守派が強く、2014年・2019年両選挙ではプラボウォがジョコウィの獲得した票を上回って勝利した西ジャワ州スカブミにて。世俗派のジョコウィ路線を連想させるギブランの写真は掲載されていない。地方ごとの投票行動に合わせたポスター戦略が取られている。



写真4 市民と挨拶をするプラボウォの副大統領候補ギブラン（中央の水色のシャツの男性）



写真5 路上販売業者が集められ、プラボウォ=ギブラン候補のシャツが配布された。シャツの製作や配布のような戦略は、豊富な資金力を持つプラボウォ陣営だからこそできるものである。



写真6 候補者討論会を視聴しながら盛り上がるガンジャル支持者。プラボウォ候補に対するブーイングの嵐であった。



写真7 選挙戦で市民と挨拶をするアニス候補（中央手前で白いシャツに紫色のタオルを肩にかけている男性）。アニスの選挙戦キックオフは首都ジャカルタ北部のスラム街であるタナ・メラ地域であった。



写真8 アニス候補（左側）を擁立する福祉正義党（PKS）議員（右側）のポスター。「PKS が勝利したらジャカルタは首都のまま」と書かれている。しかし、首都移転の中止を掲げるポスターはこれ以外見かけなかった。



写真 9 ジャカルタ中心部のスディルマン通り沿いに掲げられた PSI の大型ポスター。「PSI はジョコウィの政党である」と書かれてあり、ジョコウィとその次男で党首のカエサン・パンガレブの顔写真が掲載されている。